

鹿島昌也

(埋蔵文化財センター主任学芸員)

昨年訪れた韓国慶尚南道金海市の大成洞古墳博物館で、1点の鉄製品に目が止まった。展示キャプションには、2号墳から出土した「三枝槍」とあった。武具や馬具と並んで展示されていたが、これは、漁具の刺突具「ヤス（簀・魚掬）」とみられる。注目されたのはその大きさで、長さ41cm、刃先幅11.5cm、重さ730.6g（慶星大学校博物館2002『金海大成洞古墳群Ⅰ』から）である(①)。また、29号墳からは釣針(13.5cm)も出土している(②)。古墳群の南500m 海畔川左岸の独立丘陵上には、6世紀頃までに形成された貝塚を伴う環濠集落の鳳凰洞遺跡も所在し、川や潟湖での生業活動がうかがえる。

日本では、弥生時代まで多くの骨角製漁具が集落遺跡からみつまっている。古墳時代には、鉄製となり、その殆どが古墳の副葬品として出土する。京都府の淀川・木津川流域の椿井大塚山古墳や紫金山古墳、会下山古墳からは漁具のヤスが出土し、富山湾を望む氷見市阿尾島田A1号墳からも、三叉形の長さ11.0cmを測る鉄製のヤスが1点出土している(③)。古墳に埋葬された首長が河川や潟湖、沿岸の物流や交通のみならず、漁獲権をも掌握していたことが推測される。

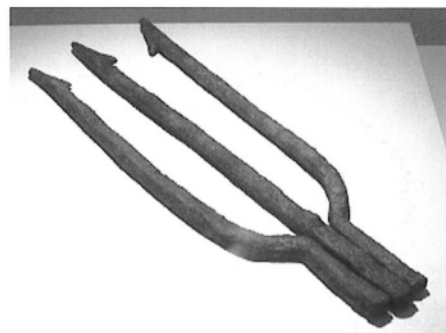
ここで想起されるのは、富山市水橋金広・中馬場遺跡(古墳～江戸時代前期)で出土した長さ36.5cm、刃先幅19cm、重さ500gの大型のヤスである(④)。同遺跡では、これまでに出土例がないヤスなどの線刻画を描いた木摺白が2点あり、井戸水溜めに転用され出土した(⑤)。これらは、近くを流れる白岩川での川魚漁に関わる漁具や施設と推測される。大型のヤスは、河川を遡上するサケなどの大型魚を捕獲する漁具とみられる。

白岩川流域には古墳群が形成され、流域に広がる平野部を掌握した首長墓と推測されている。水橋金広・中馬場遺跡内にも大型円墳の若王子塚古墳と宮塚古墳が東西に並存し、すぐ南にも円墳が発掘された。古墳群は河川を意識して築造され、葬られた首長は漁獲権を手中に得ていた可能性もある。遺跡は、江戸時代前期には河川漁の拠点となっていた。当時の人々は、祖先の首長が眠る古墳を間近に見ながら木摺白に漁具を線刻し、豊漁を願った。

韓国と富山での大型ヤス出土の背景に、河川を介した生業活動に対する時代を超えた人々の想いが伝わってくる。



墳丘から(海畔川と平野を挟んで西に慶雲山)



大成洞2号墳出土「三枝槍」

